

序にかえて

“Der Strom der Weltgeschichte hat Nippon aus seiner idyllischen Stille forgerissen!”
〔177〕
「世界史の奔流が日本を牧歌的な静けさからひきさらった！」

一八八六年十二月二十九日付、ミュンヘンの『アルゲマイネ・ツァイトウング（新聞）』の読者は、この一文を目にした。書いたのは完璧なドイツ語を駆使できた森林太郎、のちの文豪、軍医総監、当時は大日本帝国陸軍の衛生士官としてドイツに留学していた「森鷗外」である。

私たちは、一九九〇年代より日本におけるクリスマスの文化史的研究に取り組んでおり、ザビエルの時代から現代に至る、主にキリスト教徒以外の一般日本人とこの西洋の祭りとの関係を探ってきた。そのおり、各時代のさまざまなジャンルの人物を照射していく中で、森林太郎自身の経験、趣旨に基づいて演出された降誕祭クリスマスにとりわけ興味を惹かれた。

森家では、一九一三年から毎年欠かさずホームクリスマスを行うようになるが、最初の記述は「夜櫛の木に燭火ろうかを点してZ.の祭の真似を為す」という一行である。

今回、森家到的をしぼって研究を進めていくうち、この家族のクリスマス祭に寄せるなみなみならぬ関心、愛

着にあらためて驚嘆させられた。

クリスマスという実体に森家の人びとはどのようなイメージを抱いたのか。そしてその祝祭を特徴づけるものとは何なのか。どのような意味を持つに至ったのか。

林太郎はドイツ留学時代、そして家族とのクリスマスに関しては日記に書き残した。しかし、「鷗外」関係の学術論文、この件に関する記述、言論はほとんどないと言っている。そして「生涯、無神論者であった」とさえ評される。散見されるのは、「鷗外は日本の近代作家の中でキリスト教に対してもっとも冷淡だった作家の一人でしょう」といったコメントである¹。果たして本当にそうだろうか。

日本のクリスマスは、ザビエルが伝えた「ナタラ」(降誕祭の意、ポルトガル語で *Natal*) 以来、長い歴史的背景を持ちながら、外国からも、おおかたの日本人からもキリスト教とは距離をおいた一種の年中行事、単なるイベント的現象とみなされている。

私たちの関心は、むしろ本人はけっしてキリスト教徒とは思っていない一家族の生活の中からクリスマスの痕跡をピックアップし、その世俗的な表現を分析することで、日本に受容されたキリスト教の文化的、精神的意味を探ることにある。

本書では林太郎の故郷・石見国いみのくにが世界史に登場した十六世紀から、石見銀山が世界遺産となった現在までを編年体によって綴っていく。その中で、林太郎が六歳から十歳という物心ついた時期に津和野で起こったキリシタン弾圧の事件、おそらく彼がはじめて西洋の宗教と触れるきっかけとなったであろう浦上キリシタン収容所における殉教者の問題を軸に、彼の生涯にわたる宗教観の遍歴も考察する。

方法としては、森家の個人が残したテキストを読み解くことに重点をおいた。幸運にも多くの貴重なエピソード、エッセイ、小説などが残されたおかげで、これまで見逃されてきた点、知られていない側面、誤解された面など興味深い発見にもめぐり会うことができた。

出版するにあたり、本名「森林太郎」として死に臨んだ彼の意志を尊重し、氏名は森林太郎で統一することにした。しかし、一八八五年から一九一三年まで使われたペンネーム「鷗外」に関しては、彼自身が用いた箇所、あるいは書き手が使用した場合のみそのままとする。ただし、世間で通用しているという便宜的な理由からタイトルに限りてはその例外とした。

本書は、ドイツで出版した *Ogais "Noël"*² を、日本語による縮小版として書き下ろしたものである。ベルリン・フンボルト大学日本文化研究センターの野崎恭夫氏の下訳をはじめとする多岐にわたる協力があって実現できたことをここに記す。

1 三好行雄、「鷗外が西洋で見落としたものは何か」というテーマにおける平川祐弘、小堀桂一郎、竹盛天雄他の座談会。竹盛天雄(司会)『森鷗外』学生社、一九七七年(二二二頁)ホジウム日本文学、六三頁。

2 Klaus Kracht, Katsumi Tateno-Kracht: *Ogais "Noël": Mitwörterbuch aus dem Leben des Hauses Mori und des Burgstädtchens Tsuwano - jenseits der idyllischen Stille*, Wiesbaden: Harrassowitz Verlag 2011, 885 S. (Zunni: Quellen, Studien und Materialien zur Kultur Japans, Herausgegeben von Klaus Kracht, Bd. 11).

鷗外の降誕祭^{クリスマス}——森家をめぐる年代記 目次

序にかえて
はじめに

シュライアマハーの『クリスマス祭——ある会話』

3

第一部

天文十八—嘉永六（二五四九—一八五三）年 11

山陰道の石見国／津和野藩／藩校「養老館」

嘉永六（一八五三）年 18

「牧歌的な静けさ」の終焉／中国における「太平天国の乱」

安政二（一八五五）年 21

エメの夢

安政三—万延元（一八五六—一八六〇）年 22

日本ではじめてクリスマスツリー

第二部

文久二（一八六二）年 29

林太郎の誕生／ローマからの贈り物／上海の港に林立する
マスト

元治二・慶応元（一八六五）年 32

浦上からの訪問者／てるクララの MARIA 像

慶応二（一八六六）年 36

「フランス寺」のイヴ

慶応三（一八六七）年 37

ノートルダム・ドゥ・ジャポン
日本の聖母

慶応四・明治元（一八六八）年 38

「五榜の掲示」／「浦上四番崩れ」への関与

明治二（一八六九）年 42

青衣の MARIA／西周との出会い

明治三（一八七〇）年 46

乙女山と蕪坂

明治四（一八七二）年 51

養老館の閉鎖／岩倉使節団

明治五（一八七三）年 52

津和野から首都へ／木戸孝允 ノートルダムにて

明治六（一八七三）年 57

キリシタンの放免

明治七（一八七四）年 58

冬至祭と神農祭／ヒボクラテス崇拜

明治十一（一八七七—七八）年 62

お雇い外国人による「耶穌の祭日」

明治十二—十三（一八七九—一八八〇）年 64

ヨーロッパの花火

明治十四（一八八二）年 65

留学断念し、陸軍省へ／「進歩的な」プロテスタント信徒
たち

明治十七（一八八四）年 67

ドイツへの旅立ち／「足の指の間に、下駄の緒挟みて」／
在ベルリン日本公使がクリスマスパーティー／アーノル
ト・マイヤーの論説

明治十八（一八八五）年 72

ライプツィヒの新年／雅号「鷗外」／システイーナ—峰子
と MARIA／フォーゲル夫人宅の体験

明治十九(二八八六)年 85

ロートが喚起した誕生日／バイエルンの民間信仰／「自由人」ルター／ミュンヘンの基督木 Christmasbaum

明治二十(二八八七)年 92

赤十字社／師走のベルリン

明治二十一(二八八八)年 97

大和会での新年／革靴／帰国、そしてエリーゼ

明治二十二(二八八九)年 102

赤松登志子との結婚／ウエルテルと舞姫

明治二十三(二八九〇)年 106

津和野にかけたウイリオン神父／秩序と「博愛」／於菟誕生^{オト}

明治二十四(二八九一)年 112

「正義」か「義務」か

明治二十五(二八九二)年 114

『烈真貝』^{レツシンヱ}

明治二十七(二八九四)年 117

戻った於菟

明治二十九(二八九六)年 119

父・静男の死／小金井家と星一^{ほしはじめ}

明治三十(二八九七)年 122

足尾銅山鉍毒事件／笹ヶ谷銅山／聖夜の「三元寇」^{げんごう}

明治三十一(二八九九)年 128

小倉の生活

明治三十二(二九〇〇)年 131

安国寺さんと哲学談義／林太郎のマリア／「和独会」のクリスマス祭

明治三十四(二九〇一)年 134

ベルリンで花祭り／独身にピリオド

明治三十五(二九〇二)年 137

荒木茂子(志げ)との結婚／アンデルセンのマリア／鹿足^{かあし}郡郡長にプロテスタント信徒

明治三十六(二九〇三)年 143

茉莉誕生^{マリ}

明治三十七(二九〇四)年 146

日露戦争へ出征／西洋音楽とエンゼルフード／愛国主義と人道主義

明治三十八(二九〇五)年 152

「かど松」と「基督の木」／満州からの便り／「文明のサンタクローズ」

明治三十九(二九〇六)年 161

妻子のもとへ／「原罪」の克服

明治四十(二九〇七)年 165

不律誕生^{フリリ}

明治四十一(二九〇八)年 166

篤次郎と不律の死／『耶蘇降誕祭の買入』^(かいいれ)

明治四十二(二九〇九)年 171

渾沌と正直／『平日』悪妻というレッテル／杏奴誕生^{アンス}／もろ神とZanaduの子／『ジョン・ガブリエル・ポルクマン』／『波瀾』^(はらん)

明治四十三(二九一〇)年 181

『歯痛』と『聖ジュリアン』／生存競争 『二人舞台』／「有楽座子供日」／三越の「流行会」

明治四十四(一九一一年) 190

類誕生／青年の「青い鳥」／普請中の場所

明治四十五・大正元(一九二二年) 195

「かのやうに」の哲学／弟・潤三郎の結婚／『吃逆』におけるルドルフ・オイケン

大正二(一九一三年) 202

「生活の木」／イブセンの聖夜／『鈍一下』のモデル本間俊平／十字架にかけられた大塩平八郎／赤い撫子の会／「Zou」の祭の真似を為す／聖パウロ修道女会の仏英和高等女学校／『聖ニコラウスの夜』／プレゼントされた児童書／珍しいお客さん／不要となった「鷗外」

大正三(一九一四年) 226

『ノラ』の上演／ドレスデンの楽園／『山椒大夫』 和解のすすめ／最高の贈物／「古ゲルマンの冬至祭」

大正四(一九一五年) 241

信仰の問題／『最後の一句』 愛と孝

大正五(一九一六年) 252

元旦／いつとときの解放／サンタ役の杏奴／「雀の涙」

大正六(一九一七年) 257

天禄にて

大正七(一九一八年) 261

茉莉と山田珠樹の婚約／別れの練習／珠樹への手紙／賀古鶴所への手紙／本来の「意義」への回帰／「石見神楽」とオペラ

大正八(一九一九年) 273

神前結婚式／「サンタクロオスの小父さんより」

大正九(一九二〇年) 275

ブツダが慰め／誠之尋常小学校／山田家

大正十(一九二一年) 281

映画『路上の靈魂』／別れとなったクリスマス／記憶の音楽／類の神様／於菟への心遣い

大正十一(一九二二年) 298

林太郎の死

第三部

大正十一(一九二二年) 311

パリのノエル

大正十二(一九三三年) 313

花と卵の復活祭／来なくなったサンタクロース

昭和元一(一九二六年) 315

離別

昭和四(一九二九年) 318

森家の当主として／「聖心愛子会」と津和野幼稚園

昭和五(一九三〇年) 321

代理の父 長原孝太郎画伯／再婚そして離婚／サンタじゃなかつた？

昭和六(一九三一年) 324

銀座で社交ダンス／私たちは「異邦人」

昭和七(一九三二年) 331

津和野に捧げた生涯

昭和八(一九三三年) 332

親族でお祝い／パリとの文通

昭和九（一九三四年）年 334

杏奴と小堀四郎との結婚

昭和十（一九三五年）年 336

志げのラストクリスマス

昭和十一（一九三六年）年 339

志げの死

昭和十二（一九三七年）ころ 342

クリスマスを続ける約束

昭和十三、十四（一九三八、三九年）ころ 344

幸福のとき

昭和十五（一九四〇年）年 346

「時代の歩みにしたがいながら」

昭和十六（一九四一年）年 347

類と安宅美穂との結婚

昭和十七（一九四二年）年 348

山田珠樹の宗教観

昭和二十（一九四五年）年 350

『長崎の鐘』／疎開先のクリスマスケーキ／喜多方にて

昭和二十一、二十二（一九四六、四七年）ころ 355

ロートリングンから来たネーベル神父／ガラスのおはじき／

トオレ亭と再会

昭和二十三（一九四八年）年 358

「薔薇色の夢」／青衣のマリア降臨地

昭和二十四（一九四九年）年 361

解雇

昭和二十五（一九五〇年）年 362

溝鼠

昭和二十六（一九五一年）年 364

「いけにえの小羊」／神社のようなマリア聖堂／突然現われ

た聖僧

昭和二十七（一九五二年）年 368

憲法記念日に「乙女峠まつり」／マリー・アンヌ・ドゥ・

ティリーの精神

昭和二十八（一九五三年）年 370

「文豪鷗外」の帰郷／毎週やってくる「降誕祭」

昭和三十（一九五五年）年 374

やつともらえた原稿料

昭和三十一年（一九五六年）年 375

「地獄絵」

昭和三十二（一九五七年）年 378

「父と二人でする降誕祭」

昭和三十四（一九五九年）年 380

「父」としてのカンドウ神父／遠藤周作の立場

昭和三十五（一九六〇年）年 387

茉莉のポツティチェリ

昭和三十七（一九六二年）年 389

鷗外生誕百周年記念

昭和三十八（一九六三年）年 392

三島邸のクリスマスパーティー（一）

昭和三十九（一九六四）年 396
三島邸のクリスマスパーティー（一）

昭和四十（一九六五）年 398
おとぎ話

昭和四十二（一九六七）年 400
喫茶店「邪宗門」

昭和四十三（一九六八）年 403
歴史に対する共同責任

昭和四十四（一九六九）年 405

杏奴の津和野紀行―冬／杏奴の津和野紀行―春／クリスマス・ディナー配達サービス／三島由紀夫の「クリスマス・イブ」

昭和四十五（一九七〇）年 410
三島由紀夫の死

昭和四十六（一九七二）年 412
愛に包まれた幸福

昭和四十八（一九七三）年 414
公害問題／母国へ帰った神父

昭和四十九（一九七四）年 418
杏奴の主張

昭和五十一（一九七六）年 420
太陽が見守るクリスマス／《無限浄救》

昭和五十四（一九七九）年 425

「クリスチャンでないクリスチャン」

昭和五十八、五十九（一九八三、八四）年 426
「楽楽」／ベルリンの森鷗外記念室

昭和六十二（一九八七）年 429

茉莉の死

平成三（一九九二）年 435
類の死

平成十（一九九八）年 436
杏奴と四郎の死

おわりに 439

『木精』／『杯』／津和野町町歌／「石見人森林太郎」

『鷗外の降誕祭』を書き終えて 451

謝辞 454

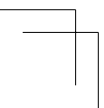
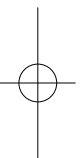
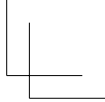
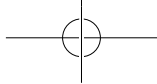
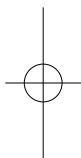
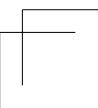
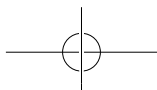
森林太郎の家系図 456

図版出典一覧 457

凡例

- 一、森林太郎の作品による引用文は、一九七一年から一九七五年に刊行された岩波書店版『鷗外全集』に拠った。
- 二、読者に読みづらい引用文は現代日本語訳とした。その場合、原則として原文は脚注に示した。
- 三、引用文における表記は、原則として新漢字、旧仮名づかいを採用し、例外として著者が振り仮名を付した場合のみ、（ ）を付した。（ ）は中略を意味する。
- 四、漢文には、現代日本語訳も付記した。
- 五、年齢表示はできるだけ満年齢とした。

鷗外の降誕祭^{クリスマス}——森家をめぐる年代記



はじめに シュライアマハーの『クリスマス祭——ある会話』

林太郎が遺した一万八千冊を超える蔵書の中に、見過こされがちでこれまでに気にも留められなかった一冊の本がある。

それはブレスラウ市(Breslau)のヘルンフト兄弟団(Herrnhuter Brüdergemeinde)出身で、一八〇四年からプロテスタンティズムの強い都市ハレ(Halle)、次いで一八一〇年からは新しく創立されたベルリン大学で教鞭を執った神学者にして宗教哲学者のフリードリヒ・シュライアマハー(Friedrich Daniel Ernst Schleiermacher)作『クリスマス祭——ある会話(Die Weihnachtsfeier – Ein Gespräch)』(1806)である。これは、もともとクリスマススの贈り物として考案され、「クリスマスとは何か?」という問いに答えるものである。

宗教的信仰心と学問的認識を融合した非教条的なロマン主義を代表するシュライアマハーの思想は、倫理学と宗教哲学において後代にまで影響を及ぼしたことで、新プロテスタンティズムの父、ベルリン大学の真の精神的な創始者とみなされる。

林太郎はシュライアマハーをプラトンの翻訳者、また『宗教論——宗教を軽んずる教養人への講話(Uber die Religion – Reden an die Gebildeten unter ihren Verächtern)』(1798/1799)の著者として理解していた。

シュライアマハアの『クリスマス祭』は、その内容がもつ時代性と個々人の伝記的背景にもかかわらず、神学書、信心書として十九世紀および二十世紀になっても読み継がれてきた。哲学者ヴィルヘルム・ディルタイ〔1834-1911〕(Wilhelm Dilthey)は、ゲーテが『ファウスト』で表現した復活祭の描写と神学的に対となるものをこの書の中に、すなわち「聖夜の祭にきわだつキリスト教の感情世界の美と幸福」を見出す。³

シュライアマハアは、十九世紀初頭のプロテスタントのサロンにクリスマスという行事が有する重要性を読者に印象づける。そして非キリスト教徒でさえ魅了する、あの「感動的な雰囲気」の「謎」への答えを導き出す。つまり「クリスマスの喜び(Weihnachtsfreude)」といった言葉の意味を説き明かすのである。⁴

音楽抜きでクリスマスはあり得ない。作中人物のゾフィーは「どんな音も正しく響かせる」ことができ、「美しいものすべてに心から喜び」を感じる。彼女は楽譜を贈られ、「ああ、偉大な音楽！ 一生クリスマスの気分が味わえるわ！」と感謝の気持ちを表す。彼女は歌い、演奏する。カロリーネがピアノを弾く。音楽は「喜び」を、「救いの感情」と「謙虚な崇拜」を表現する。「というのも、どんな美しい感情も、それにふさわしい音を見つけてはじめて完全な形となって現れるのだから。言葉では不可能なのである。言葉は常に間接的な表現でしかない。[...]音楽は、まさに宗教的な感情に最も近い」。すなわち「宗教的な領域でのみ、音楽はそのまっただき姿を表わす」。この域内にこそ「芸術の精神」が宿るのであって、「副次的なえせ芸術」においてではない。「だからこそ、キリスト教と音楽はつよく結ばれ、両者は互いを美しく高め合うのである」⁵。

そして、さらに中心となるのは贈り物である。「というのも、互いに贈り物をし合うというすばらしい習慣は、宗教的歓喜の純粹な表現にほかならないからで、その喜びは、喜びというものが常にそうであるように、自然に発した善意、与えること、奉仕することから生まれる。そして、われわれ皆がともに喜ぶ大きな贈り物」すなわ

ち神の子の誕生、人類の救済」は、小さな贈り物「クリスマスプレゼント」によって表現される」⁶。

また、クリスマスは女性の祭りでもある。マリアが「神の子の幸福な母」であるように、母親はみな自分をマリアの後継者とみなし、わが子を「神性の啓示」として「心から謙虚に崇める」ことができる。「すなわち、母親はみな自分の子の中にキリストを見るのである」。幼い子どもの教育を「神聖なる勤め」と捉える。「母の愛は永遠なるもので、われわれの本質の主和音である」。こうした意味から、どんな母親も「マリア」といえる。⁷

クリスマスの本質とは「みんなの喜びの日」である。「世界が生まれ変わる日」、「新しい命を世界に告知する日、人生においても心機一転するとき、そのような最も喜ばしい日である」。「クリスマスの意義」とは、「若返ること、子ども時代への回帰、祝福を受けた幼子キリストによってもたらされた新しい世界への快活な喜び」にある。クリスマスが「大切な行事として認識されるようになった背景には」、「この行事が各家庭に採り入れられ、子どもたちに祝われるようになった」という「事情が大きく貢献している」。子どもはこの行事の「主役」である。この

3 Wilhelm Dilthey: *Leben Schliermachers. Erster Band. 3. Auflage. Zweiter Halbband (1893-1897)*. Herausgegeben von Martin Redeker. Berlin: Walter de Gruyter & Co. 1970, 146.

4 Friedrich Daniel Ernst Schliermacher: *Kritische Gesamtausgabe. Im Auftrag der Berlin-Brandenburgischen Akademie der Wissenschaften und der Akademie der Wissenschaften zu Göttingen* herausgegeben von Hermann Fischer, Gerhard Ebeling, Heinz Kimmeter, Günter Meckenstock, Kurt-Victor Selge. Erste Abteilung: Schriften und Entwürfe, Band 5, Berlin, New York: Walter de Gruyter 1995, 63.

5 同前、46-50, 63-64.

6 同前、47, 62, 77.

7 同前、49-52, 65-66, 70-71, 96.

日はすべての人が子どもになる。だからすばらしい。しかし女性と違って、男性は「ふたたび子どもとなるためには」、まず「改心」せねばならない。⁸

この『クリスマス祭——ある会話』は、林太郎の蔵書のうちで宗教、神学的な領域に属する書籍の中では比較的小さな本であり、書き込みもなく、また彼の著作にもれつきとした関連記述は見当たらない。それにしても、このシュライアマハーの本を所有していた事実は見逃せない。というのもディルタイによれば、同書はキリスト教の本質そのものの論考と言えるからである。そしてディルタイがこの本と神学的に対となる作品として挙げたゲーテの『ファウスト』を林太郎が長年にわたって読み込み、血肉化したことは知られるところである。

無教会主義を提唱することになる内村鑑三はアマースト大学留学中、ドイツ語の講義でゲーテの文学、殊に『ファウスト』に衝撃を受け、「その悲劇は天来の霹靂（へきれき）のように余を撃った。余は今もなおあの『この世の聖書』を参照する」と述べている。⁹

ゲーテは旧約聖書の『ヨブ記』から『ファウスト』を発想したといわれるが、その第一部には、悪魔のメフィストフェレスが語りかける次のような科白がある。

兔に角君に教えるがね。一切の理論は灰いろで、緑なのは黄金（こがね）なす生活の木だ。（… und grün des Lebens goldner Baum）（森林太郎訳）¹⁰

右の一節について、歴史民俗学者ウエーバー・ケラーマン（Ingeborg Weber-Kellermann）¹¹は、ゲーテがクリスマス

スツリーを念頭において表現したと解釈する。¹¹ 闇に輝く「黄金（こがね）なす木」とは、「永遠の生命」、「天国」の象徴である。¹² この「ツリー」が本書のキーワードとなる。

- 8 同前、50-52, 62, 70-71, 75, 81, 88, 92, 97.
- 9 内村鑑三「余は如何にして基督信徒となりし乎」『内村鑑三著作集』二二冊、岩波書店、一九五三—一九五五年、第一卷、一四—一頁。
- 10 「ファウスト 第一部」『鷗外全集』三十八冊、岩波書店、一九七—一九七五年、第十二卷、一五一頁。
- 11 *Das Weihnachtst. Eine Kultur- und Sozialgeschichte der Weihnachtszeit*, Luzern und Frankfurt / M. 1978, 104.
- 12 Werner Völker: *Weihnachten bei Goethe*, Stuttgart: Deutsche Verlagsanstalt 1999.